
メカプリンセスっ！ ~プリンセス様、もう勘弁してください~

けすとねる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メカプリンセスっ！ ～プリンセス様、もう勘弁してください～

【Nコード】

N2391BA

【作者名】

けすとねる

【あらすじ】

俺が出前のラーメンを届けた屋敷で出会ったのは、美しいブロンドの髪に透き通るような肌、きれいな紫色の瞳を持つ、中性貴族のコスプレをしたロボ女だった。バルカン砲で撃たれたり、ロケットパンチで殴られたり、体に爆弾をしかけられて「このままですと、五分後にあなたの体はこっぴゃみじんになりますわ」。がらがらと崩れ去る俺の平穏な生活。もう勘弁してください、プリンセス様！ 完全マイペースな女アンドロイドに振り回される高校生男子の悲劇を描いた、破壊型青春コメディです。 「小説家にな

ろう「初投稿です。」「指摘・感想などいただけるとうれしいです。
でもバカバカしいお話なので、真面目なストーリーを期待してる方
コメントナサイ……。」

第1話 プリンセス様、出前をおとりになる

その屋敷のことは、以前から知っていた。

俺は毎週読んでいるマンガ雑誌を家の近くのコンビニで購入している。だがたまに売り切れていることがあるため、そのときは少し離れた本屋に行く。自転車で約十分。その道の途中に、例の屋敷があるからだ。

見るからに豪邸といった感じのそれは、塀の長さが何百メートルもあり、入り口の門は俺が通っている高校の校門よりずっとデカいきつとこの辺りでも ひよっとしたら全国でも有数の金持ちが住んでいるんじゃないかと思わせるくらい、大きな邸宅だ。さえない中華料理屋の手伝いを毎日やらされている、さえない高校生の俺なんかには一生縁の無いところだ。そう思っていた。

だがある日、学校から帰ってくるとすぐにオヤジから「このラーメン、出前頼むわ」といつものように渡されて行ってみると、そのラーメンの届け先がこの屋敷だったのだ。

まさかこんな形で屋敷に入れるなんて思っていなかった俺は、門の前に着くと自転車を降りて、しばらくのあいだぼうぜんと長い塀をながめた。曲線と直線の模様が刻まれた、西洋風の真っ白な壁。鉄製の門の向こうにはきれいに整えられた芝生の中に、白い小石詰めめの道が走る風景。その奥には、落ち着いたクリーム色の外壁の館

(……すげえ)

何度見ても大きな家だ。大きな家としか云えない。思わずため息

が出る。

（俺もこんな家に生まれてりゃ、好きなゲームがやりたい放題だったろうな……）

家ではマンガを読むかテレビゲームをするかしかない帰宅部の俺には、そんな発想しか浮かばない。まあ、こんな家に生まれた日には、一流大学に入るために毎日勉強づけにされるのかもしれないが。

でも一体、どんな人が住んでいるのか。というかそもそも、なんでこんな立派な家の住人がうちのラーメンなんか出前をとったんだ？ 疑問に思いながらも、とりあえずラーメンの入ったおかもちを手に門の横まで行ってみる。

表札は無い。近くにインターホンがあったので、押してみる。

（すげえ怖いオッサンが出てきたらどうすっかな……いや、これだけ大きな屋敷なら、執事が出てくるのか？）

いろいろ考えながら、返事を待つ。

少しして、インターホンから声が聞こえてきた。

「……はい、どちら様でしょう」

意外にも女性の声だ。もしかして、メイド？

俺はモノホンのメイドに会えることに興奮を抑えきれずもとい失礼の無いように丁寧な言葉づかいで答えた。

「『来陽亭』です。ご注文のラーメンをお持ちしました」

「あら、ありがとう。すぐそちらまで行きますわ」

そう云ってインターホンが切られる。意外に普通の対応だ。ちょっとほっとした。

すぐに、とはいっても屋敷自体が大きく、建物の入り口からこの門までもそうとう離れているから、少し時間はかかるだろう。そうタカをくくって、俺は今から現れるメイドがかわいくて清楚な娘でありますようにと祈りながらもこの間にラーメンが冷めないかと心配しながら、直立不動のまま待った。興奮してるな、俺。

と、そのとき。

とっぜん俺の頭の上で、ブンッ！ という鈍い音がした。

その直後。

どんがらがっしゃん！

と、なにかが数メートル先に大きな音をたてて落ちる光景が目映った。

「な、なんだ!？」

一瞬たじろぐ俺。

見るとそこには

中世の貴族が着るようなすその長い白黒のドレスに身を包んだ細

身の女性が、うつぶせになってばったりと倒れていた。

「?????」

突然のことであっけにとられて声が出ない。そんな俺の前で、彼女はむっくりと顔を上げると、わりと高いところから落ちたはずなのに平然とした様子でぱっと起き上がった。そして服のすそをパンパンと払いながら、ひとりごとのように云う。

「(ピピッ?)……やはりテレポートでお迎えするのはまだ難しいようね。着地もままならないなんて……あら、あなたがラーメンを持ってきてくださった方?」

「は、はあ……」

いったいどうやって屋敷から出てきたんだ……。

ってか、この女だれだ?

着ている服は(期待していた)メイド服じゃない。歴史の教科書に載っているような、どこかの西欧貴族のドレス風の服だ。美術館にでも行つて「ああ、この時代はそんな服着てたんだ。すごいなあ」と適当に感心して終わるような時代錯誤な格好。映画の撮影ですか? と云いたくなるような衣装を、目の前の女は普通に着ている。

顔つきを見ると、歳は俺と同じくらいに見える。十六、七くらい。もしかして、ここの主の娘とか? にしても、普段からこんな服を着てるって、なんてコスプレの激しさだ。

なんとなく嫌な予感がして顔が引きつっている俺にかまわず、彼

女は上品な言葉づかいで話しかけてきた。

「わざわざここまでおいで下さって、感謝いたしますわ。お願いしていた『ちゃあしゅうめん』はそちらの中？ 少し見せていただけるかしら？」

「はあ……」

わざわざ見せるほどのものでもないんだが。

とって断る理由も無いので、俺はおかちからラーメンを取り出す。どこの中華料理屋にもある、いたって普通のラーメンだ。

だが彼女はどこか興奮した様子でそれを見つめる。

「まあ、これが『ちゃあしゅうめん』？ 手にとってもよいかしら？」

はあ、まあ、どうぞ、熱いので気をつけて下さいと俺が云うと、彼女は両手で器を持ち上げた。そしてラーメンの表面をこれでもかというほど凝視する。

(実はラーメンを見るのは生まれて初めてとか？ ……まさかな)

そんな俺の耳に、なにやら電子音や機械音のようなものが聞こえてくる。

「ゴゴ……ピピ……ガ……ピピ……」

「(……なんの音だ?)」

「……成分……豚の肉……小麦粉……ネギ……水……醤油……豚の脂……魚介類原料不明……」

「……?」

すると彼女は、器にかぶせてあったラップをおもむろにはぎとると、いきなり指をラーメンの中に入った。

「あつ、熱いですよ!」

思わずさげんだ俺にかまわず、彼女はなにやらつぶやいている。

「……水面温度39 ……水中温度58 ……放出成分……」

「(熱くないのか……?)」

そうしてしばらく指をスープの中につけたままひとりごとを続けている彼女が、ふと視線をラーメンからはずして云った。

「あら、おかしいわ」

「えっ?」

「お茶の成分が検出されないわ。色が赤いからってつきり紅茶だと思っただけど……こちらの食べ物、何茶をお使い?」

「いや、お茶なんて入ってないですけど……」

「うそ。これ、茶臭麺じゃありませんの?」

「茶臭……」

茶臭……ちゃしゅう……ちゃーしゅう……チャーシュー……あ、なるほど。

「って、どんなラーメンだよそれ!」

「ダージリンの香ばしい香りのする、欧風ラーメンだとお母様から聞きました」

「あるわけないだろそんなラーメン!」

思わずタメ口でつつこんじまった。

「チャーシューっていうのは、ここについての豚肉のこと……」

「まあ、レモンライスやミルクを入れるんじゃないやありませんの?」

「入れるか!」

俺が云うと、彼女はがく然とした顔になって、力なく器をおかもちの上に置いた。

「なんてこと……わたくしの研究不足でしたわ……」

研究不足も何も、常識で分かると思うんだが……。

俺の嫌な予感が、最大限にふくらもつとしていた。

格好を見たときに感じたが、やっぱりそうだ。こいつ、なにかが絶対大きくズレてる。

金持ちのお嬢様だからなのか、なんなのか。まさかチャーシューメンを知らないとは。俺の方こそがく然としたい。

だが客の前でそうするわけにもいかず、俺は元のですます調に戻って云った。

「ええと……で、このラーメンどうしますか」

「せっかくだから、頂きますわ」そう云うと彼女はなぜかけろっと元の表情に戻り、またラーメンの器をもちあげた。

……なんでもいいや。とりあえず代金をもらってもう帰ろう。

「そうですね。ではお代を」と俺が云い終わらないうちに、彼女が云った。

「ここまで来て頂いたお礼をしなくてはいけないわ。なにもない家ですが、どうぞおあがりになって」

おあがり……

ってこの屋敷に？

「いや、出前に来ただけなんで、そこまでしてもらわなくても……」

首を振って断る俺。正直、家が豪華すぎて、俺みたいな人間が入

っていいのかとビビッてしまう。それに早く帰らないと、いつものように「どこで油売ってたんだ！」ってオヤジが怒るだろうし。

だけでもしかしたら、俺のくだらない一生のうちでこんな立派な屋敷に招かれるという機会は無いかもしれない　というか絶対無い。100%無い。

こんな家の住人に会っていること自体がすでに一生分の奇跡、喜ぶべきことだ（たとえその住人がどれだけズレていたとしても）。
やっぱりここは　いや、でもやっぱり　。

そんな俺の心境など知る由もなく、彼女はお礼に誘ってくる。

「どうぞおあがりになって」

「いや、でもほんとに……」

「どうぞおあがりになって」

「でも……」

「どうぞおあがりになって」

「うーん……」

「どうぞおあがりになって」

「いや、やっぱり……」

「どうぞおあがりになって」

「ええと……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……じゃあちょっとだけ」

「どつぞおあがりになって」

「はー……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どござおあがりになって」

「分かってますって！」

「どござおあがり」……「ちんぐどござ」

なんてしつこさだ……。

第2話 プリンセス様、もっと出前をおとりになる

「いま紅茶をお持ちいたしますわ」

「はあ、ありがとうございます」

俺は豪華絢爛な応接室らしき部屋に通された。

天井にはきらびやかなシャンデリア、床には高価そうなカーペット。壁には有名そうな絵。俺が座っているのはがっしりした木製の椅子。そして正方形のテーブルには真っ白で染みひとつないテーブルクロスに、真っ赤な花のささった花瓶がひとつ。

その先には、チャーシューメンの器がのっかっている。

どう見ても場違いだ。ラーメンと、俺。

店の小汚い服で椅子に座るのが申し訳ないくらい、室内全てが高級品（だと思つたぶん）で整えられている。築三十年ですきま風のふくうちの家とはレベルが明らかに違う。居心地がめちゃくちゃ悪い。

俺が落ち着かずにきよろきよろしていると、彼女がお盆に紅茶と茶菓子らしきものをのせて戻ってきた。そしてそれを俺の前に慣れた動きで置く。

「お茶はコートジボアール産のシズオカ・キョート茶、お菓子は台

湾のパティシエール、ニッポンノ・タマシーさんのマカロンですよ」

「（日本と外国がごちゃごちゃじゃねーか……ほんとにあんのかよそんなの）」

俺がいくぶん引きつった顔で目の前の紅茶とマカロンを見下ろしている、彼女が云った。

「さあ、召し取れ……あじ」

「えっ？」

「（「コロ……ピー」さあ、召し上がれ）」

「（いま、召し取れって言わなかったか……？）」

さらに顔を引きつらせながらも、俺は彼女に云った。

「あの、俺にかまわず先にラーメン食べて下さい。麺がのびますんで」

「麺が……のびる？」

彼女が首をかしげる。

「麺がのびるといふことは……増量するといふこと？　ならわたくし、少し時間をおきますわ。その方がたくさん食べられますもの」

そういう意味じゃねー、と俺は心の中で頭を抱えた。

「あの……麺がのびるってというのは、麺が水分を吸っちゃってコシがなくなるってことで……要するにマズくなるんです。それに時間がたったらスープも冷めるし」

「まあ、そうなの？ では、早めに食べた方が良いでしょうね」

云ったが早いか、彼女は俺の目の前から消えた。

「??？」

そして、俺の向かいの席にとっぜん現れた。

……あれ。俺、疲れてんのか。あいつが瞬間移動したように見え
たな。きっと気のせいだ。

「では、失礼して」

そして中世貴族の少女が、やはりというべきか予想通りというべきか、箸ではなく金色に輝くフォークで、パスタでも食べるかのよう
にそそくさとラーメンを食べ始める。頭が痛くなってきた。

だがいままで気がつかなかったが、よく見ると彼女はけっこう整
った顔立ちをしている。透き通るようなきれいな肌に、やや紫がか
った大きな瞳。肩の下までのびるブロンドの長い髪は毛先までさら
りとして美しい。貴族の格好をして白く細い手で小さな口にラーメ
ンを運ぶそのギャップが、むしろかわいらしく感じる。門の前での
俺の祈りがかなえられたようでうれしい。神様ありがとう。でも神
様、できればもう少しズレてないコの方がよかったかな。

彼女はなれない手つきで麺を全て平らげると、スープもごくごく
と一気に飲み干した。食べっぷりだけは気持ちいい。

「これがチャーシューメン……なんとも異国の雰囲気を感じる味で
すわ」

そりゃ、西洋じゃないものな。

俺はマカロンを口に放り込み、紅茶を少しずつ飲みながら、彼女
の様子をうかがった。スープは飲み干したのに、まだラーメンの器
を両手にもちながら、その中を見つめている。

ん？ 器の底に何かついてるのか？ と俺が思ったその瞬間だっ
た。

彼女が、器の縁に思い切りかじりついた。

「(ぶーっ!?)」

口に含まれていた紅茶が思わず吹き出た。

驚くというよりもはや「どうして？」という疑問がわく。彼女は
陶器でできた器の端に歯をあて、しきりにカチカチと音を立てなが
らかもつとする。俺はもはや敬語をつかう気力をなくして力なく云
った。

「……な、なにをしてるんだ……？」

「器をかじり取るうとしております」

「あの……器は、食べ物じゃない……んだが……」

「あら、器は食べるものではないの？」

当然食べるでしょ？ とでもいわんばかりに、彼女が純粋な目を向けてくる。

ズレ方が段違いだ。世間知らずというレベルじゃない。さすがにここまで金持ちになると、平民が思いもよらない境地に達してしまふのだろうか。俺には一生手の届かない世界だ。むしろ知らない方がよかったかもしれない。

どうしたらいいのかさっぱり分からなくなった俺にかまわず、彼女はまた器にかみつき始めた。いったいあいつの頭の中はどうなつて

そう俺が思ったとき。

彼女が器の一部をぺきつ、とかみちぎった。

「いつ!?!」

そしてせんべいでも食べるかのように、彼女はパリポリと陶器の破片をかみくだいていく。

「……え……あれ……?」

俺は一瞬、目の前でなにが起きているのか理解できなかつた。

彼女が、ラーメンの器を、食べている。淡々と。静かに。

ふと顔を上げた彼女が、不思議そうに俺の方を見る。

「どうぶあされまふいたか？」

口を動かしながら、間の抜けたようにしゃべる彼女。口の中が切れて血だらけにでもなっていそうだが、そんな様子は全く無い。

どうなってるんだ……？

まさかこいつ、人間じゃ……

いや、と俺は考え直した。他人を疑うのはよくない。

これは夢だ。俺が勝手に妄想した夢なんだ。

きっと彼女が現れる前から　屋敷の前に着いたときから　いや、そもそも親父に出前を頼まれたこと自体が夢だったんだ。その証拠にほおをつねってみれば、ほら……いてっ。

涙が出そうになった。

一気に顔が青ざめる俺の前で、彼女はどんどん器を食べ進み、ついに全てを腹の中におさめてしまった。

「ごちそうさまでした。とても美味でしたわ」

本来ならもう一段階前が出るべき言葉だと思っのだが、もはやそれについても自信がなくなってきた。

屈託のない顔で満足そうにほほえむ彼女に対し、俺はもうどんな言葉を返していいのかさっぱりわからなくなった。目の前のできごとが現実なのか虚像なのかすら判断がつかない。俺は半分思考が停止した状態で、か細く云った。

「……………あああありがとうございます。またよろしくお願いします。あ、器、頂いておきますね……………」

「なにをおっしゃっているの。器はもう食べてしまいましたわよ」

「器……………うつわ？ ああ、『ウツワ』のことですか。で、ウツワはおいしかったですか」

「ええ、とつても。長石と珪石の配合が絶妙でしたわ」

「そうですね。ならよかった。あはは。あはははは。じゃあ、器を頂いておきますね」

「なにをおっしゃっているの。器はもう食べてしまいましたわよ」

「器……………『ウツワ』を食べたんですよね。じゃあ、器を……………」

……………。

すっかりしろ！すっかりしろ、俺！！ 目の前の現実から目をそむけるな！！

彼女はラーメンの器を食べたんだ！ どうやってかは知らないが、とにかく食べたんだ！！ なんだよ『ウツワ』って！ 自分で云つててわけわかんねーよ！！

俺は自分を奮い立たせた。俺がいまやっている格闘ゲームのキャラ、老ネルソン師範も云つてたじゃないか。「混乱したときこそ平常心。平常心が大事なのだよ」と。大丈夫。俺にならやれる！

などと俺が自分で自分をはげましていると、いつのまにか彼女は小さなかごをもって俺のそばに立っていた。

「おわっ！？」

びつくりして椅子から立ち上がる俺に、彼女は笑顔をふりまく。

「ボンボンはいかが？」

「ぼ、ぼんぼん……？」

「アメ玉ですよ。いかが？」

チャーシューメンのお礼だろうか。彼女が唐突にアメをすすめてきた。

よく考える俺。この非現実的な状況から抜け出すには、一刻も早くこの家から抜け出すことが一番だ。こんなアメを食べて「けつこうなお味ですね」などのんびりお世辞を云っている場合じゃない。自分を取り戻すんだ。そしてくだらないけどそれなりな元の世界に帰ろう。

何が起きたのか理解できない。思考が現実を認めようとしない。
だが本能は、俺に強く告げていた。

殺される。

彼女はバルカン砲をもとのようにしまうと、また笑顔をふりまいてきた。

「ボンボンはいかが？」

「いただきます！ いただきさせていただきます！ あむっ……うっ、うん、けっこうなお味ですね！」

「まあうれしい。全部食べていただいでかまいませんのよ」

「はいっ！」

俺は精一杯の笑顔を返しながら、心の中で涙を流した。

武力行使だ……。

俺は自分のいま見た映像が信じられなかった。彼女の頭の横からなんか出て、俺に向けてなんか物騒なものを撃ってきた。

いったいなんなんだこいつは。皿を食べて、弾を撃って……絶対人間じゃないだろ。やつぱり夢だ。これは悪い夢なんだ。その証拠にほおをつねってみれば……いたい。

もう勘弁してくれ。

一秒もこの家にいたくない。早く逃げたい。折れそうになる心をなんとか支えつつ、俺はふらふらとおかもちを手にした。

「あら、もうお帰りになるの？ ボンボンは」

また表情が消えかかる彼女に、俺はあわててアメの入ったかごを持ち上げて云った。

「ああ！ と、とてもおいしかったので、家族や友達にも配ろうかな、なんて……ははは」

「まあそうなの？ では、なにかに包んで」

「い、いい！ そこまでしてもらわなくても！ こっちで適当に包むんで！」

「あら、遠慮なさらなくていいのよ」

「いや、本当に大丈夫なんで！ じゃあ、ばいなら！」

俺はダッシュで部屋の入り口に行き着くと、ドアを速攻で開けて出て行った。後ろで「いけない、お待ちになって。お代がまだ」とかいう声が聞こえた気がしたが、そんなことにかまっていられない。お代より自分の命の方が大事だ。

俺は家を出て猛然と門のところまで駆け抜けた。だがやっぱり遠い。帰宅部の俺はぜえぜえと息を切らせて門の前でへばってしまった。

後ろを振り返る。追ってくる様子はない。よ、よかった……。

と思ったとき。

ずらっと並ぶ家の窓のひとつが一瞬、キラッと光ったように見えた。

あそこはたしか、あの女の部屋のあたり

そう気づいた瞬間。

その窓から、ものすごい速さで人間の腕が飛んできた。

「……………えっ」

俺はかわす間もなく、そのロケットパンチをもろに顔面に受ける。

「ぶへえつつつ！……！」

見事な右ストレート。ぶったおれる俺。

おかもちもアメもばらばらになって地面に転がる。俺は意識を失いかけながら、目の前に落ちた白く細いひじから先だけの腕をなごめた。

あいつだ。あいつの腕だ。間違いない。

よく見ると、手には手紙らしきものがにぎられている。俺は薄れゆく意識の中で力なくそれを手にとり、表書きを見てみた。

「ラーメンのお代です。ごちそうさまでした」

かわいい丸文字だった。

第3話 プリンセス様、イスをお求めになる

「なんだ壬堂、今日はこのコンビニか」

そう環田に云われ、俺はすぐさま「それはこっちのセリフだ！」と云い返した。

環田たまきだてつじ徹次は俺と同じ帰宅部。授業が終われば家に帰って宿題でもやって過ごすか、寄り道をして近くのコンビニで漫画でも読むか、お互いそういった平凡な生活を送っている高校の同級生だ。

環田は特に変わりばえのしない中肉中背の俺と違ってかなり体がかい。中学までは柔道部だったらしく、体をかなりきたえていたらしい。だが帰宅部であるいまとなっては特段に力が強いというわけでもなく、ただただ立ち読みのときに横幅をとるだけの体になっている。

高校で最初に話したのは繊維化学の授業のとき。実験で同じ班になったので話してみると、環田も帰宅部というのでなんとなく話が合った。合った、といってもただ、授業終了後すぐに帰る生徒が俺以外にもいたのが分かったというだけの話だが。

で、今日は俺が週刊マンガ雑誌「ヤングアフタヌーン」を読みいつものコンビニに行こうとしたら、環田が後ろから声をかけてきた、というわけだ。

「今日はこのコンビニか」と環田は云ってきたが、俺は基本このコンビニしかいかない。むしろヤツの方がいるんなコンビニを渡り歩

いている。

環田は、自他ともに認めるマンガ中毒者だ。

毎週読んでいるマンガ雑誌は少年ダンプ、少年マガジーン、少年サムデイをはじめ、ヤングダンプ、ヤングアフタヌーン、少年グランプリ、ガンガンヤング、少年サバイバル、エリスネクスト、コンプエリス、コミックブレイダー、はては少女マンガのアカリボン、ハロー！、ユージン、ユメミラン、DXユメミラン、しよこらプリプリ、Kissess等々。月刊まで含めればさらに増える。とにかくコンビニにあるマンガというマンガを全て読む尽くしている男だ。環田ほど図体のデカイ男が女兒向けの「ハロー！」を読む姿は相当人目を引くと思うのだが、本人はもはやなれてしまったためかなんとも感じていないようだ。

ただ、一箇所ですべてのマンガ雑誌をそろえているコンビニはなく、また何日も居座っていると店員に目をつけられるため、学校に近い六つのコンビニを毎日一箇所ずつローテーションで回っているらしい。

なぜそんなに毎日毎日大量のマンガを読むのかと訊いたことがあるが、そのとき彼はどこか遠くの山岳でもみるような目つきで、力強くこう返してきた。

「そこにマンガがあるからだ」

いや、かつこよくねーぞ、全然。

そんなヤツと今日はいつしよにコンビニで立ち読みするはめになりそうだ。環田といると俺までマンガマニアで少女マンガ好きと思

われるので、必死に他人のフリをしないとイケないから面倒といえは面倒。まあ、いつもどおりなにも話さずお互いただ黙々とマンガを読めばいいだけの話なのだが。

環田と並んで自転車で少し走ると、目の前にいつものコンビニが見えてきた。自転車を降りようとしたところで、環田が話しかけてくる。

「今週の『ヤングアフタヌーン』は『聖なる街のプリンセス』がある週だったか？ 壬堂君、ちゃんと毎週読みたまえよ。ワシ予想では、あれはマンガ誌に残る名作になるだろうからな」

セリフがかった話し方で自分のことをワシと呼ぶのは以前から。話すたびに気になるが、今日はなぜかそこに上から視線が加わっている。俺は少しムカツとしたので云い返した。

「なんでお前にマンガの読み方を押し付けられなきゃいけないんだよ。俺の読みたいように読ませろ。それから、マンガを読んでいる間は俺に話しかけんなよ。コンビニに入った瞬間から、俺とお前は他人だ」

「なっ……どうした壬堂、ワシがなにか気にさわることでも言ったかね？」

「そうじゃなくてだな。高校生男子で堂々と小学生低学年女子向けの『ハロー！』とか『アカリボン』を読んでいるやつはそれだけでオタク扱いされかねえだろ。しかもコンビニで。俺はオタクじゃねえんだから、お前といっしょにされるのは嫌なんだよ」

「ワシはオタクではない。ただ小学校低学年女子の好み俺の好み

とたまたま合致しただけだ」

「十分オタクじゃねえか！ だいたいお前みたいなガタイのでかいやつが少女マンガなんか読んでたらコンビニで目立つだろ。他人の目とか気にならねえのかよ」

「マンガを読み始めるとトランス状態に入るからな。さっぱり気にならぬわ。うわははは」

「うわはははじゃねえ！ 自分が他人の悲しい目線にさらされた状態にあることにちよつとは気づけ！」

「考え過ぎだぞ、壬堂。ワシなんかほら、あそこにいる客に比べれば空気がたいなものだ」

そう云って環田が指差すほうに、俺も視線を向けた。

俺の目に、コンビニの中をさまよっている中世貴族風の白黒ドレスを着た女の姿が目に入った。

……………。

「は、はうあああああああつっ!？」

ヤツがなぜここに……。

目を見開きひどく驚愕する俺。めまいがし、嫌な汗が出る。

環田は俺が予想以上のリアクションをしたためか、どことなく心配げに「……どうした壬堂、そんなにショックだったか？」と云ってきた。

それどころではなくなった俺は、急いで再び自転車のサドルに乗った。

「あれ、おい。どこいくんだ」不思議そうな顔をする環田に、俺はひきつった表情をみせた。

「いや、俺さ、ちょっと腹の中で眠っていたサナダムシが目覚めたみたいでさあ……急に腹が痛くなってきたから、先に家帰るわ。それじゃ!」

俺は云い捨てると、すぐさまペダルをこぎだした。

できれば記憶から消したかった人間……人間なのかどうなのかもよくわからない……いや、絶対人間じゃない女。こんなところで会ったらなにをされるか分かったもんじゃない。

俺は全力で自転車をこいだ。一刻も早く逃げなければ。

だが突然。

自転車のペダルが、急激に重くなった。

「なっ!?!」

俺は立ちこぎで自転車を加速させようとする。だがどれだけ体重をかけても、ペダルが一向に回らない。

「どっ……なっ……てん……だよ……これ……!?!」

すると今度は、自転車が徐々にバックし始めた。タイヤは前に回ろうとしているのに、なぜか後ろへどんどんとひきずられていく。

「おおおおっ!?!」

そしてついに

俺と自転車は、なにかの力にひっぱられるようにしてコンビニまで一気に引き戻された。

「う、うわああっ!?!」

あまりに強引だったため、俺はバランスを崩して自転車ごと地面に投げ出される。

「いつ……てえ……」

足をたたかに打った俺は顔をしかめつつ、後ろを振り返った。

そこには、いつのまにかコンビニから出ていたあの中世貴族の女が、広げた右手をつきだした格好で立っていた。

「あら、来陽亭さん。こんなところでお会いするなんて、奇遇ですわ」

……最悪だ。

いま俺は「自転車ごと後ろへ引っ張られる」という超常現象ばりの動きをみせたことに対してもっと素直に驚くべきだと思うのだが、なぜか俺の中で根拠の無い確信があった。

いまのは、この女が正体不明の力を使ってやった。間違いない。

「来陽亭さんもコンビニをご利用なさるのですね。わたくし、運がよかったです」

「あー……ごめん。君だれ？ どこかで会ったっけ？ 記憶がないなあ。それじゃあ」

俺はしれつと云って再び自転車を立て直し、自転車で走り去ろうとした。だが20mほど進んだところでまたペダルが重くなり、それ以上前へ進めないまま後ろへ引き戻された。あまりに強引だったため、俺はバランスを崩して自転車ごと地面に投げ出される。

足をしたたかに打った俺は顔をしかめつつ、後ろを振り返った。そこには中世貴族の女が、広げた右手をつきだした格好で立っていた。

「あら、来陽亭さん。こんなところでお会いするなんて、奇遇ですわ」

「どこかでお会いしましたっけ？ 俺、知らない人にかまってるヒマないんだよ。忙しいし。それじゃあ」

俺はしれっと云って再び自転車を立て直し、自転車で走り去ろうとした。だが20mほど進んだところでまたペダルが重くなり、それ以上前へ進めないまま後ろへ引き戻された。あまりに強引だったため、俺はバランスを崩して自転車ごと地面に投げ出される。

足をしたたかに打った俺は顔をしかめつつ、後ろを振り返った。そこには中世貴族の女が、広げた右手をつきだした格好で立っていた。

「あら、来陽亭さん。こんなところでお会いするなんて、奇遇ですわ」

……どうやら現実を認めるしかないようだ。俺はこの女から、逃げられない。

第4話 プリンセス様、もっとイスをお求めになる

でもまさかよりによって、俺のいきつけのコンビニに来ていとは。しかも時代錯誤な貴族のままの服装で。

俺がこの女の屋敷に出前を届けたのは一週間前。どんぶりの器を食べるところをみせられ、バルカン砲で撃たれ、あげくロケットパンチを食らった俺はその場で意識を失ってしまった。それからどうやってかは覚えていないが、なんとか俺は自宅に帰り着いていた。

以来、あの屋敷には近づいていない。少し離れた書店に行くにもいまでは違うルートをつかっている。あのときは「なにかのきっかけで『世にも奇妙な世界』に足を踏み入れてしまったんだ。きっとそうだ」と自分の中で解釈することにし、記憶から早いとこ消そうとしていたのだ。

それが無情にも、俺の目の前にあるとき、あのままの姿で現れてくれた。もう泣くほかない。

そして早速、彼女はわけのわからない力で逃げる俺を強引にひきとめたのだ。

すそのふくらんだ白黒の貴族のドレスは変わらず。前回とデザインが多少変わっているようだが、大差ない。要は西暦十 世紀のプリンセス様がお召しになっているような格好だ。

町を歩く人々やコンビニの客からの視線がとても痛い。俺は世間から目立たないようにこれまで生活してきたつもりなのに、いまそ

の大事に守っていた何かを音を立てて崩れてしまったような気がする。

「どうかされました？ むつかしい顔をなさって……」

そんな周りの目などどこぶく風で、彼女が紫色の瞳で俺の顔をのぞきこんでくる。云いたいことがあり過ぎて、どれからぶつけていか迷う。

そのとき。

横からメラメラとわいてくる殺気を感じ、俺は顔を向けた。

そこには、顔をひくつかせながらわなわなと震えている環田の姿があった。

「み、壬堂……お前……」

俺は状況を取りつくるおうと必死になるしかなかった。

「あ……い、いや、違うんだ、環田。俺にはそんなコスプレ女の趣味はなくてだな、ただの店の客で……あ、いま自転車が後ろにふつとんだのは……なんとというか……突風？ そう、突風がふいて……」

「お前……そんなかわいい娘に……」

って、あれ？

「そんなかわいい娘に……呼び止められるなんて……」
「た、環田……？」

「お前、本当は……………『リア充』だったんだな!!」

リア充とは「リアルが充実している」つまり、充実した私生活を過ごしているということ。ただ、こんな言葉を使う場合は要するに「彼女がいる」ということと同義だ。

「って、俺はリア充じゃねえよ!」

「うそをつけ! こんな金髪できれいな北欧人タイプの高貴な女子がお前みたいな平凡きわまる男をわざわざ呼びとめるのは、女が前の彼女であるという理由以外には考えられんだろう!」

「誤解だ! この女は前にラーメンの出前を届けただけで……………」

「その後、屋敷にお招きして楽しくお話をさせていただきましたわ」

だーっ! 余計なこと云うな!!

女の言葉に、いよいよ環田の負のオーラが燃え上がった。

「壬堂。ワシはお前だけは裏切らないと思っていたのに……………ワシといつしよに三年間、女になど目もくれず放課後は即学校から帰り、コンビニでマンガを読んでストイックな学生生活を送るものだと思っていたのに……………」

「た、環田。落ち着け! 俺はこいつとはなんの関係も……………できればこいつと会った記憶すら消したいくらいで……………」

「くそー!! やはりワシはひとりぼっちだったのだ! 女などつくるようなやつをこれまで同志だと思っていた自分がはずかしい……………」

…彼女いない歴〓自分の年齢である男にとって、女をつくる男は敵だ！ ワシはもうだれも信じん！ だれも信じんぞ！！」

そう無茶苦茶なことを云って環田は若干涙目になりながら、ダツシユで走り去る……と思つたら、反転してコンビニに駆け込んだ。

そして本のコーナーに行くと、棚から「アカリボン」を抜き出して猛然と読み始めた。黒々しいオーラを全身から放ちつつ、いきなり全開でトランス状態だ。周りの客は青ざめた顔ですぐに環田から距離をとる。

「今日の奈美子ちゃんはどうなったかな……ふふ、そうか。七股かけてた彼氏と別れたかあ。いいぞ、いいぞ。このまま全ての恋愛マシガが救いようなない失恋で終わればいいのだ。ふふふふ……はははははははは！！」

そこまで彼を追い込んでしまったことにさすがに罪悪感を覚えはじめてきた俺の気持ちなど全く察することなく、そばのコスプレ娘は平然と話しかけてきた。

「まあ、愉快的なご友人ですこと」

「どこをどう解釈したらそんな結論になるんだ……」

俺はもうため息しか出すものがなくなった。

「……一応聞くが、さっき俺を自転車ごと引き戻したのは、どうやったんだ」

「『ハンドグラビティ』のことですか？ あれはわたくしの右手か

ら発した』。micrOG+』重力波により、人間の体内にあるごく微弱な磁場『マグネヒューポネシス』をレクト化し、さらにワイドネクターAシートとコルモゴロフ^①ノビロフ熱を併用することで生じるニューシビノエルQontumを螺旋方向に」

「いや、もういい。聞いた俺が悪かった」

もつため息すら出ない。

「……で、俺になんか用か」

「あら、そうでしたわ、来陽亭さん」

「俺の名前は来陽亭じゃねえ！ 壬堂だ。壬堂光一！」
ミ下ウ^②ウイチ

「壬堂さんとおっしゃるの？ あらいけない。登録しなおさないといけないわ」

「登録？」

「（ガチャッ、ピッ、ピーッ）上書き保存できましたわ。これで壬堂さんがわたくしの周囲100m以内に足を踏み入れれば、わたくしの頭の中に『壬堂』という文字が出ますわ」

お前は警報装置か。

「そんなことより」彼女は困ったような顔をして云った。

「わたくし、いまコンビニに買い物にきているのですけれど、目当てのものが見当たりませんの。一緒に探して下さらないかしら」

無理。絶対無理。そんなことしたら俺はもうこのコンビニに一生入れねえ。

……だがご機嫌を損ねると、前みたいにもたこめかみからバルカンを砲を出しかねないからな。なんとかやんわりと断らなければ。とりあえず、何を買うつもりなのか訊いてみよう。

「……で、わざわざコンビニに何を買いにきたんだ？」

「ゲバノン製の最高級木製イスですわ」

イスーーーーー！！

「イスがコンビニに売ってるわけねーだろー！！」

「うそ。お母様は、コンビニにはあらゆるものが二十四時間売っている、便利なお店だとおおせでしたわ」

「だからってイスは売ってねえよ！」

「でしたら、フーゲンブルグの銀製ナイフセットは？」

「ねえよ！」

「でしたら、サラゴザのロングカーペットは？」

「ねえよ！」

「でしたら、レジタリア産のガーネットのネックレスは？」

「ねえよ！」

「でしたら、ミールピンクノイアデスタンは？」

「ねえ……えっ？」

「そんな……わたくしのお目当てのものが、ひとつも売っていないなんて……」

最後のはなんだった？

……まあ、よく分からないまま彼女はショックで顔をこわばらせた。

「せっかく三回もエネルギーチャージしてここまでたどり着いたというのに……神様、ひどいわ。私になにか悪いことでもしたというの？」

そうして両手で顔を覆うと、彼女は俺の前でそのままひざをおって泣き崩れた。

「えっ！？ おい、ちょっと……」

顔が引きつる俺にかまわず彼女は泣き続ける。道を歩いている人たちが俺の方を指差してなにかささやきあっているのが目に入る。みんな、俺の方を非難するような目つきで。

……終わった。今日までの俺の波風立たない生活が。

「頼むから、こんなところで泣くなよ。誤解されるだろ……」

「す、すみません……壬堂さんにご迷惑をおかけするところでした」
もう迷惑どころの話じゃないよ。かなり手遅れだよ。

なんとか立ち上がる彼女に、俺はなにもかもあきらめて逆に悟りをひらいたような心境で云った。

「あの……イスだったらさ、その角を曲がったところにある家具屋に売ってるから。とりあえずイスだけでも見てきたら？」

「行けませんの」

「？」

「わたくし、今日はここへ来るようにしかインプットしておりませんでしたから、そちらへ行くにはいったん屋敷に戻ってインプットしなおさなければいけませんの。でももうエネルギーパックは家に帰る分しか残っていませんし……ああ、どうすればいいの」

意味がわからん……。

「そうだわ。わたくしの代わりに、壬堂さんが買ってきてくださらない？」

「は？」

「わたくしはここでお待ちしておりますから、いま申し上げた品々を買いに行って頂くといいかがでしょうか？」

「いや、いかがもなにも、俺はお前のつかいっぱしりじゃねえし。だいたいそれなら家に帰って屋敷のやつらにでも買いに行かせればいいじゃねえか。何で俺が」

そう俺が話していると

彼女がふいに近づき、顔を寄せてきた。

「なっ、なんだよっ……？」

一瞬、彼女のかわいい顔が間近にきて驚く俺。おまけになにやらいい香りまでする。……普段女子と話す機会なんてほぼゼロだから、胸が少し……いや、相当高鳴る。

で、なにをしたのかと思っていたら

彼女はいつのまにか手に持っていた赤く光る小さなランプを、俺の首筋にそつとくつつけていた。

すぐに離れる彼女。俺はつけられたものを指で触る。

「……なんだよ、これ」

「時限式の爆弾ですわ。このままですと五分後に壬堂さんの体はこっぴみじんになります」

……。

あおう。それはひょっとして

「爆弾を停止する信号は私の手からしか送れません。イスを買ってきていただければお止め致しますわ」

「……冗談だろ？」

「いいえ。本気ですわ」

完全に脅迫だ！

この常識外の女のことだ。きっとこの爆弾も本物に違いない。俺はすぐに首につけられたランプをはがそうとした。だがどれだけ引っ張っても取れる気配がない。

「無駄ですわ。爆弾は壬堂さんの首の組織に入り込んでおりますので」

平然と云う彼女に対し、さすがに俺の堪忍袋の緒もぶちぶちと切れはじめてきていた。

「お前……いいかげんにしろよ……」

限界だ。ただコンビニに行きたかっただけなのに、なんでここまでふりまわされないといけないんだ。

いくらかわいいからって、やっていいことと悪いことがある。もうこんなやつを云うことをこれ以上聞いてられるか。俺はこれまでにたまっていた怒りをぶつけるように、彼女の肩につかみかかる。

「これをおぼせ。いますぐにだ！俺はお前の召し使いじゃない」

ふうっ!？」

前がかりになっていた俺の下腹にいきなり、彼女は強烈なボディブローを撃ちこんできた。

細く白い彼女の右腕からは想像できないほどの威力に、俺は息が止まり、その場で倒れて動けなくなる。

「い、いいパンチだ、ジョー……」

「淑女の体に気安く触れてはいけないわ、壬堂さん。さあ、早くしないと、あと四分二十九秒しかありませんわよ」

酷すぎる……。

俺が耐えかねる腹の痛みにどうしても動けずにいると、彼女は追いつちをかけるように俺を見下ろして云った。

「あまりこの場におられるようだと、さきに壬堂さんの体が八チの巣になってしまいま・す・が」

そう云って急速に表情が無くなる彼女を見て、俺はすぐに下腹の痛みなど無視して立ち上がった。

「ミドウコウイチ、全力でイスを買いに行つて参ります!」

「まあ壬堂さん。男らしいのね。では、このお金をお持ちになって「はいっ、それでは!」」

俺は心で泣きながらダッシュで家具屋にかけこむと、ゲバノン製だかなんだかよく分からないがとりあえず一番高いイスを店員に頼

んで出してもらい、速攻でレジに向かった。

俺は彼女からもらった金をそのまま全部置き「早く計算してください！ 人ひとりの尊い命がかかってるんです！！」と訴えた。

鬼気迫る俺の表情にかなり圧されながら、店員がレジを打ち金を受け取る。ああ、あと何分だ。二分ほどか。いや、もう一分ちよつとしかないかもしれない。事態は一刻を争うのだ。早くしてくれ！

そう俺が念じていると、店員が顔をひきつらせながら俺に受け取ったはずの紙幣をみせた。

「あの、お客様。この紙幣、円ではなくシンガポールドルなんです
が……」

えっ

第5話 プリンセス様のせいでクラスメートの手下になる

私立柳辻学園^{なぎつじ}第二高等学校。それが俺の通っている高校の名前だ。

全校生徒三百五十二名。このあたりでは比較的少人数の高校だ。各学年にAからDまでの四クラスがあり、俺がいるのは二年生のAクラス。Aなんて優秀そうなアルファベットがついているが、クラス分けは成績に関係なくばらばら。だからAクラスといっても頭がいいわけではない。そもそも俺の成績なんて下から数えた方が早いし。

姉妹校の柳辻学園「第一」高等学校には普通科と特進科があるが、第二高等学校のうちにはひとつしか科がない。その名も「イノベーション科」。イノベーション＝革新・新機軸ということで、「技術立国日本の次世代を担う人材を育てるため、さまざまな科学分野の技術的な知識を学び、広く教養を育む授業を行う」ことを目的としている日本で唯一の学校らしい。ようはかなり理系寄りの高校ということだ。

そのため、学内にはいろんな科学実験設備がある。あれや、これや、それ……いや、詳しい名前は覚えてないんだが。中には国内でここにしかない「超高速粒子なんとか加速器」とか「遺伝子操作プログラムなんとかかかとか」というのもある。……正直、あまり興味がない。うわさでは魔法や妖術の実験施設なんてのもあるそうだが、学園伝説じみているどこまで本当なのかはよく分からない。

そんな学校で、六時間目が終わって放課後となつたいま、帰宅部であるはずの俺は珍しく教室に残っていた。

掃除委員である俺は、今日までに「掃除啓発ポスター案」を作らなければいけなかったからだ。

委員には図書委員やら生物委員やら体育委員やら実験委員やらいろいろあるが、クラス全員がなんらかの委員に入らなければならぬ。俺は楽なら何でもいいやと思ひ、一番仕事が少ない掃除委員を選んだ。この委員がやることといえば掃除器具の管理ぐらいなのでとても気楽なのだ。

だが年度の初めだけ「掃除啓発ポスター」つまり「ゴミはきちんと分別しよう」「窓はいつもきれいに」とかいうメッセージをのせたポスターの案を作り、全クラスの掃除委員が集まる委員会でそれを提出しなければならぬ。案が採用されれば、全校舎にそれが掲示される、というわけ。イラストを描くのが好きな人なら喜んでやりそうだが、あいにく俺はそういうことにあまり興味がないし、そもそも絵心が致命的に欠落している。そのため、なんとか簡単に適当な案を一、二枚描くだけで済ませようと考えていた。

で、俺はさつさと家に帰って案を描こうと思っていたのだが

「うーん、ここところがイマイチなんだよね。邪魔くさいけどもう一度書き直すか」

なぜかいま目の前にいる同じ掃除委員の女子に呼び止められ、二人して案を描いている、という状態になっている。

「案、っていつてもどこまで描けばいいんだろうね。鉛筆書きだけでいいのかな。でもそれじゃダサすぎかあ。……あ、字を書くスペース空けるの忘れた。ここも消さないといけなのか。めんどくさ」

ずっとひとりごとを云っているこの女子は、ウリュウサヤカ瓜生沙弥香。明るい性格で友達も多い、クラスでもわりと中心グループにいる人気者だ。

特に男子からはアイドル的存在で、この高校に入ってからたった半年で、二十人以上の男子から告白されたりプレゼントをもらったりした……といううわさがある。といっても、いま瓜生はそれら有象無象の男どもとは別の男子とすでに付き合っているみたいなのが。

たしかに顔立ちはよく、バトミントン部に所属しているせいが見目に健康的で、茶髪をツインテールにくくった髪型もよく似合っていてかわいい。さらにフランクな性格で、だれとでも愛想良さそうに話す。こんな娘とお近づきになれば毎日どれだけ楽しいかと思うといてもたつてもいられない気持ちはよく分かる。……いや、あくまでたとえばの話。

だがひとつだけ、彼女には欠点というか、好きになれない点がある。それは

「でもこの案もさあ、本当に私らが描いてて意味あるのかなあ。だって選ばれてるのは、毎年三年生のだっていうでしょ。だったらさ、気合入れて描いてもあんまり力の無駄づかいつていうか？ 時間の無駄づかいだしさ。ああ、それで思い出したんだけど、三年生の掃除委員の球磨田。あいつ昨日うちのバト部が体育館の場所取るうとしたらさ、『ここは私らの場所だからあっちいけ』とか言うんだよ。うちが先に予約してたのに、なーんか因縁つけてくるのよねえ。明日の委員会でなにかつかつかつてこなければいいけど。ああ、ところぞろぞろ……」

よくしゃべる。本当によくしゃべる。

ほかにだれもない教室でポスター案を描き始めてから三十分間、俺の方はひとことも発していないのだが、瓜生はほぼノンストップでしゃべり続けている。たまに聞く分にはいいのだが、これがエンドレスで続くということはこの女に告白した男子は把握していたのだろうか。

俺はふだんどの友達グループにも属さず、教室の端で静かな状態で存在しているため、当然瓜生と話す機会など無い（というか他の女子と話す機会も無い）。そんな俺がいきなり高い声のマシンガントークをあびせられたので、正直対応に困ってずっと下を向いたまま案を描いている、という状況だ。

あまりに俺が無反応だったためか、瓜生が今度ははっきりと俺に向かって云ってきた。

「……壬堂くん、聞いている？」

どこからどこまでをだ？ と俺は思いながらも、いちおう返事をした。

「……まあ、一応」

「一応？ なら相づちくらいうってくれればいいのに。なんか一人でしゃべってるみたいじゃん」

実際そうなんだが。

「ってか瓜生さん、全然ポスター案進んでねえよ」

「ああ、こんなあと三分もあつたらばぱつと済んじゃうから。心配しなくてもだいじょーぶ！」

絶対三分じゃ済まねえ……。

俺は未来永劫続きそうなポスターづくりに終止符をうつと提案してみた。

「あの、さ……もうそれぞれ家でやったほうが早くねえかな。このままじゃお互いいつまでかかるかわからねえし」

「え？ あ……わ、わかった。もうしゃべらないから。続きやろ、続き！ えーと、ここの色は青色にしてですね、こっちは……」

ひとりごとは相変わらずだが、とりあえず瓜生の手が動き出した。

そもそも、なんで瓜生は俺といっしょに放課後残ろうと誘ってきたのか、それが分からない。

一人じゃ集中できないというなら、たくさんいる友達のだれかを連れてきたらいいんじゃないか。瓜生がポスターづくりに熱心で、同じ掃除委員の人に意見を聞きながら描きたい！ とかいうんであれば分からないでもないが、瓜生もどちらかという俺と同じく「こんな面倒な作業はさっさとすませたい」という姿勢だ。なおさら俺といっしょに作業する必要性は薄い。

二年生で同じクラスになったものの、瓜生とはまともに話したことが無い。それが急に放課後二人きりの状況に持ち込んできたということは……。

いや、まさか。俺は頭の中で否定した。よくある青春ラブコメ的な展開で、「実は私、壬堂君のことが……」なんてこと、あるはずがない。あるはずがないんだ。あるはずが。

「壬堂くん」

「……えっ、あ？ いや……えっ？」

妄想にとりつかれつつあった俺に瓜生が不意に話しかけてきたので、俺はわけもなくびくっと反応してしまった。けげんな顔で俺の方を見る瓜生。

「なにその反応」

「い、いや、なんでもない……で、なに？」

「……あのさあ。その……」

すると、いままでしゃべり続けてきた瓜生が珍しく云いよどむ。そして少し間を空けてから、ふるえた声で云った。

「……壬堂くんにはさあ……か、彼女とか、いるの？」

おおっ!?!?

なんだその質問は。どうしてそんなこと訊いてくるんだ。

瓜生はこちらに目を合わせずつつむく。表情はうかがえないものの、どこか緊張しているような様子だ。ついさっきまでとは明らか

に違う張りつめた雰囲気、彼女の方からただよってくる。

頭の中で、冷静な俺が「んなわけねえだろ。おちついて考えてみるよ。そんなわけのわからないうまい話があるわけねえって！」と全力で否定しているが、興奮したもう一人の俺が「こんな状況でそんな質問……もう答えはひとつしかないだろ。いけいけ、いつちまえ！」とささやいてくる。だが冷静な俺は「……意外にそうかもな。俺って一度女の子に告白されてみたかったし。よし。いけいけ、いつちまえ！」と云って……っておい！ 冷静な俺流されすぎだろ！！

「興奮した俺」に心を支配された俺は、少々の願望も込めてシミュレーションしてみた。

『彼女は……いないよ』

『私、実は……壬堂くんのが好きなの。だから……彼女になってもいいかな？』

『……俺でいいのか？』

『うん。壬堂くんがいいの』

『沙弥香……』

という流れだろう！ 最後にさりげなく苗字呼びから名前呼びに
替えればなおOKだ！

俺は心臓の鼓動が極限まで大きくなるのを感じつつも、なんとか
平静を装い答えた。

「彼女は……いないよ」

そう云って、瓜生のセリフを待った。瓜生は体をふるわせながら、
決意したように、うつむいていた顔をぱっと俺の方へ向ける。

「王堂くん」

瓜生は云った。

「昨日、学校の近くのコンビニで、金髪の女の子を泣かせてな
かった？」

全身が石化した俺に向かって、瓜生は遠慮なく云った。

「いや、びっくりしたよ。昨日部活が休みだったからさ、早めに学校から帰ってたらいきなりすごい格好の……あれなんていうの？ ドレス？ を着た女の子が道端で泣いててさ。その目の前で壬堂くんが右往左往してたから……私、てっきり壬堂くんが彼女を泣かせたんだと思って、うわあ、人って見た目によらないな、なんて思ってたんだけど」

さっきまでの緊張したような雰囲気から一転、いたずらっ気に満ちた目で俺の方を見る瓜生。

「あれって、壬堂くんの彼女じゃないの？ まあでも全部見ちゃったからねえ。隠しても無駄だけど」

「勘違いだつて、瓜生さん！ 全部見てたんだったら分かるだろ？ 俺はあの女の店に出前に行っただけだつて」

「あれ、そんな話してたっけ？ 私は壬堂くんが『買い物ならひとりで勝手に行け！』って言って女の子が泣いたところしか記憶にな

いけどなあ」

「そんなことは言ってるねえ！勝手にデフォルメすんな！！」

「おっと、壬堂くんもそんな大きな声が出るんだねえ。感心感心」

「してる場合か！」

はああ。なんか色々期待していた自分がものすごく恥ずかしくなってきた……。

「だいたい、なんでそんなことを散々もったいぶって話すんだよ……」

「いやー、このこと話したら壬堂君がどんな顔するのかと思ったらさ、途中で笑いが抑えきれなくなりそうだったから……ゴメンね！」

てへ、と舌を出す瓜生。全身から力が抜けた。

たぶんこいつははじめから、昨日の俺とあの女の間でおきた出来事の真相を確かめようとしていたんだ。だから俺をわざとだれもいない放課後に誘って……。

「でも結構かわいかったよね、あの子。外国人？それともあの髪はかつらかな？ま、壬堂くんとそのかわいいコスプレの女の子の関係は良好だという方向でみんなに広めるから。安心していいよ」

「安心できるか！だいたいあのコスプレ女と俺とは何の関係もねえ！できれば記憶から消したいくらいなんだ！頼むから、変なうわさを広めないでくれ……」

「うん、どうしよっかな。でも私、こんなに面白いこと黙って
いられるほど、口堅くないしい」

いよいよ瓜生の顔が小悪魔的な笑みに満ち満ちてくる。見ていて
ものすごく腹立たしいが、弱みを握られている以上、主導権は完全
にあっちだ。

「……どうしたら黙ってってくれるんだよ」

俺が観念したように云うと、瓜生はニヤニヤしながら云った。

「じゃあさ、これから壬堂くんが私の子分になる、っていうのはど
う？」

「子分!？」

「うん。私の言うことをなんでも聞いて馬車馬のように働くの。簡
単でしょ」

「どこがだ! すでに馬車馬って言ってるじゃねえか!！」

抵抗する俺に、瓜生は人差し指でほおをつつきながら余裕に満ち
た表情で云う。

「でもねえ。それくらいはしてもらわないと、子分とはいえないで
しょ」

「んなことやってられっか! なんで俺がお前の子分なんか……」

「じゃあこれからバトミントン部の部員たちに王堂くんのつわさを広めてきまゝす。じゃあね」

「まてまてまて！ くそっ……………」

相当悩んだあげく、俺はしぼりだすようにして云った。

「……………本当に言うこと聞いてりゃ、だれにも話さないんだな？」

「誓ってだれにも話しません」

「……………わかったよ」

「え、ほんと？ほんとに自分になってくれるの？」

「だからなるつつつってるだろ。何度も言わせんな」

「わは、やったあ」

瓜生の芯からうれしそうな表情をみて、俺ははらわたが煮えくり返る思いだった。

まさか「瓜生からの愛の告白」になるはずだった会話がこんな結末になるとは。肩を落とす俺に瓜生は軽い調子で云ってきた。

「じゃあ早速このポスター案、私の分もお願いね」

「え！？」

「え、じゃないでしょ。自分なんだから『はい、承知しました』っ

「言わないと」

「……はい、承知しました」

「うむ、よろしい。じゃあ私は部活に行ってくるから。あとよろしくね」

そう云い残して瓜生は鼻歌交じりに教室を出ていった。

最低だ、あいつ。

瓜生の脅迫まがいの手口に、俺はいいなりになるしかなかった。目の前には、二倍に増えた俺の今日の宿題。

「コスプレ好きの男」というステータスを回避した代わりに、別の致命的なステータスを獲得したような気がして、釈然としない。

そうした俺の不安は、翌日にはさっそく現実になった。

第6話 プリンセス様のせいでもっとクラスメートの手下になる

「でさ、Cクラスの猪瀬から聞いたんだけど、苗代先生の彼氏、マレーシア人らしいよ」

「うそ〜!?! 全然そんな風にもえないし。さやりん、それほんと?」

「ほんとほんと。私もびっくりしたよ〜。ああみえて結構ヤリ手らしいよ。あー、なんかノドかわいたな。壬堂くんよ、ちょっと飲み物買ってきて」

「なっ…………し、承知しました」

お金を受け取ってパシる俺。後ろから女子たちの会話が聞こえる。

「え〜!?! 壬堂君どうしたの。もしかして、さやりんの新しい彼氏?」

「ん〜とね。彼氏じゃないけど、私の言うことなんでも聞いてくれるの」

「なにそれ、マジで?」

「へえ、さやりんかつこいい……………」

くそ、云いたいこといいやがって……………。

瓜生のいるおしゃべり女子グループが、教室から出て行く俺の姿をみてひそひそしている。ああ、いままで教室の隅で過ごしていた平穩でマイペースな俺の学生生活が遠ざかっていく……。

俺は校舎の裏にある自販機で炭酸飲料のティリンレモンを買い、さっさと教室に戻った。瓜生は女子達三人と話し込んでいてこっちに気づかないようなので、俺のほうから声をかけた。

「……瓜生さん、買ってきました」

「おおご苦労、壬堂君よ。……あれ、ティリンレモン買ってきたの。私的には『白樺ストリートティー』な気分だったんだけどなあ。子分なんだからちゃんとそこまで読んでほしいな」

「（知るかよ、そんなこと！）」

「え、なんか言ったかい？」

「……なんでもありません、瓜生さん。すみませんでした」

「うむ。次からは気をつけなさい」

腕を組んで物々しく云う瓜生に頭を下げ、俺はそそくさと自分の机に戻った。

瓜生は俺のことなどかまわず「でさ、今度の日曜、部活休みだし、みんなで富士Qハイランドに行かない？」などとしゃべりながら、俺の買ってきたティリンレモンをあっさりあけて口をつけている。

こんな日々がこれから毎日続くのか。俺は気分が落ち込んできた。あのコスプレ女のことをバラされることより、いまの状況の方が本当にマシだろうか。ものすごく疑問に思えてきた。

よくよく考えれば、こうなったのも全部あのコスプレ女のせいなのだ。人を銃で脅し、平気で殴りつけ、反抗すると泣いて他人の同情を買う。俺の人生を無茶苦茶にした卑劣な女……というのはあまりにも云いすぎだが、でも現時点ではそう思いたくもなる。

だいたい、あいつは一体なんなんだ。人間じゃないことだけは確かだ。こめかみからバルカンを放ち、ひじから先をロケットのように飛ばすんだから。気のせいかもしれないが、瞬間移動もしていたような気がする。おまけに人を磁石のように引きつける力まであるらしい。

そんなアンドロイドっばいわけのわからないやつが、なんでその辺の道を自由に歩いてるんだ？

一度きちんと調べた方がいいだろうか。 いや、どちらかというともう近づきたくない。面倒なことになるのは目に見えている。

だがあの女がこのあたりをうろついているとすれば、またはち合わせする可能性は高いだろう。どのみち遭うのだとすれば、俺ひとりの力ではなんともなりそうにない現状、いまのうちにだれかに助けを求めておいたほうが。

学校で数少ない会話をする数少ない貴重な同級生である環田は、あれ以来だいぶ疎遠になってしまった。これまでは実験の時間などで一緒に班になればひとことふたことくらいは交わしていたが、いまでは全く話しかけてこない。

まあ、環田に話しかけられないからといって俺の生活の何が変わるわけでもないの、かまわないっっちゃあかまわないのだが、やはりコンビニでの一件が尾をひいているとなると、毎日顔を合わせるだけあってあまり気分がいいものじゃない。

とりあえず事情だけは説明しておいたほうがいいのかもしいないま俺のことを「プリンセスのコスプレ女好き」だと勘違いしているのは、瓜生と環田だけのはずだ。環田も俺と同じくクラスではぼつち状態だからおそらく大丈夫だろうが、万が一にもほかのだれかに誤解したままの情報をもらしてしまわないとも限らない。いまのうちに対策を打っておこう。

俺は教室の角でぽんと立っていた環田に近づいた。だが、環田は俺の気配に気づくとなぜか半歩後ずさる。さらに寄ると、今度は逃げ腰になる。もう一歩踏み出すと、環田は背を向けて廊下へ逃げ出した。

「って、ちよつと待て!?!」

俺が追いかけると、環田は走りながらこちらを振り向く。

「どっつしてじゃ。どっつして壬堂にばかり女がしゃべりかけてくるんじゃー!?!」

瓜生のことがよ!

「いや、違つぞ環田! 瓜生さんが話しかけてきたのは、お前が思っているような都合のいい理由じゃない」

「世の中は無情じゃ！ 天はこの世に環田を生まれさせておきながら、なにゆえ壬堂まで生まれさせたのじゃー！！」

どこかで聞いたことのあるセリフだなと思いつつも、俺は足の遅い俺より遅い環田のえり首をつかんだ。息が切れてようやく逃げのをおきらめる環田。こいつ、本当に柔道やってたのか？

「だから……勘違いだつて環田。頼むから、俺の言い分も聞いてくれ……本当に困つてんだよ……」

「はあ……はあ……そんなことを言つて……本当はリア充なのを自慢……したいだけなんじゃ……」

「いいから聞けつて。いいか、まずこのあいだコンビニで会った女はだな……」

それから、俺はあの女にラーメンの出前を運んだことから始まる一連のてん末、そしてそのことで瓜生に体よく脅されていることを詳しく説明した。特に俺がどれだけひどい目にあっているのかを強調して。

ひととおり話し終わると、俺はようやく呼吸を整えつつある環田を見上げた。

「てなわけだ。分かったか？」

「……………」

「……………環田？」

「……………っ、クツクツクツクツ……………ブハッハッハッハッハッ！！」

「な、なんなんだよ、その笑いは」

「いや、だって壬堂……………こめかみからバルカン砲とか、ロケットパ
ンチとか、そんな学園SFチックな話を信じるとでもいうのかね…
…ブハハハハハッ！！」

いや、その笑い方マジむかつく。

「本当なんだって！ 本当にあの女はラーメンの器をバリバリ食べ
たんだって！ 信じてくれよ！！」

「ブハハハハハッ！！ 壬堂よ、漫画の読みすぎじゃないのかね
？」

お前に云われたくねえよ！

「ともかく、そんな非現実的な話を信じろという方が土台無理な話
じゃのう。まあ瓜生に話しかけられた理由は納得できたから、同情
はしてやるう」

「俺の方が納得いかないんだが……………それでもいいよ。とりあえず、
あの女のこととはだれにも言っつなよ！」

うむうむとうなずきつつ、どこか可笑しさをかみころすような表
情の環田。でも、これが普通の反応なんだろうな、と俺は悔しいな
がらも思った。「こめかみから出てきたバルカンで撃たれました」
なんてどれだけ訴えたところで、十人中二十人が信じてくれないだ
ろうし。瓜生なんかには「へえ。壬堂君、想像力豊かだ

ね〜」とか云われて干からびたシミズでもみるような目で見られそうだ。

結局、どうすればいいのか。鹿ヶ瀬先生にでも相談するか。たしかロボット工学が専門だつて云つてたし、あさつては先生の担当するシステム工学の授業だから、そのついでに聞いてみるのもいいかもしれない。聞いたところで、環田と同じようにバカにされるだけかもしれないが。

俺がそんなことを考えていると、去っていく環田と入れ替わるように、瓜生が背後からやってきた。

「やあ、壬堂君。いや、手下Aよ。元気かい？」

「なんで言い直した」

「や〜、やっぱり手下は手下つて呼んだ方が分かりやすいかなと思つて。それより手下A、昨日の宿題はやってきてくれたかな？」

「掃除のポスター案のことか？ 一応やってきたけど」

「うむ。えらいえらい。じゃあ今日の委員会は全て君に任せた！」

「ちょ、ちょっと待てよ。瓜生さんも掃除委員だろ!？」

「う〜ん、でも正直出席するのめんどろなんだよねえ。適当になんとか言つてごまかしてくれないかな。頼むよ、手下A。頼まれてくれないと、これから部活で君とあの子の関係を」

「誠心誠意、2 - Aの掃除委員として努めてさせていただきます！」

「よろしい。じゃあお願いね」

云って手を振りながら軽い笑顔で走り去る瓜生。腹立たしい。本当に腹立たしい。早くこの状況を打破して、元の平穏無事な生活に戻りたい。そのためには、あのロボ女をまずなんとかしなければ。

そういえば、あの子の名前、まだ知らないな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2391ba/>

メカプリンセスっ！ ~プリンセス様、もう勘弁してください~

2012年1月14日01時51分発行